No. 7

公益財団法人東洋哲学研究所

NEWSLETTER

目次

研究所紹介、代表理事・所長あいさつ ---------- 2-3
創立構想 60 周年に寄せて ---------- 4-9
連続公開講演会「信仰と理性――コロナ禍のなかで」 -------- 10-11
NEWS ---------- 12-13
研究部員会／研究部門・プロジェクト研究会 ---------- 14-15
「法華経――平和と共生のメッセージ」展 ---------- 16
「法華経写本シリーズ」／東哲叢書 ---------- 17
出版物 ---------- 18-19

「IOP NEWSLETTER」No.7 では、公益財団法人東洋哲学研究所が 2020 年 1 月から 2021 年 3 月に推進してきた研究活動のトピックスを紹介します。
※所属、肩書、講演会タイトル等は当時のものです。

研究所紹介

創 立 者：池田 大作　創価学会インタナショナル（SGI）会長
代表理事・所長：桐ケ谷 章

【沿　　革】
1962 年（昭和 37 年） 1 月 27 日 開所
1965 年（昭和 40 年）12 月 3 日 財団法人設立
2010 年（平成 22 年）11 月 18 日 公益財団法人認定

【設立趣旨】
東洋思想、なかんずく仏教のすぐれた思想・哲学を研究するとともに、各学問分野との学際的研究を推進。その成果をもって、人類が抱える諸課題の克服に貢献する。

【所 在 地】
住所：〒192-0003　東京都八王子市丹木町 1-236
ＴＥＬ：042-691-6591 / FAX：042-691-6588
開館：月曜日から金曜日（午前 10 時～午後 5 時）

あいさつ

桐ケ谷　章
（東洋哲学研究所　代表理事・所長）

創立者池田大作先生は 1961 年 2 月 4 日、仏教原点の地インド・ブッダガヤに立たれた。この地で仏教を中心とする東洋の深遠な精神文明を基盤に、人類の指針となる新しい文化を構築しゆく学術機関として東洋哲学研究所の創立を構想され、本年で 60 周年を迎えた。この佳節を記念し、先生から「東洋哲学研究所モットー」をいただいた。このモットーを拝し、今後の当研究所（以下、東哲）のあり方・使命等について考えてみたい。

一．「生命尊厳」の哲学を時代の潮流に！

近年、人権の問題が様々な角度から提起されている。核問題や地球温暖化をめぐる環境問題や国家・民族間紛争、ダイバーシティの問題。そして、いじめやネット等による私刑などに至るまで、多様な場面で人権が問われている。昨今はまた、新型コロナウイルスの影響も大きく、これらを解決する糸口は「生命の尊厳」とどのように向き合うかにかかっている。池田先生は、21 世紀を迎えるにあたって未来を見通し、2001 年から 50 年ごとに節を刻む構想を提示された。そして 2051 年から 2100 年までに「『生命の尊厳』の哲学を時代精神にし、世界精神へと定着させること」を期待し、その先に、恒久平和と絢爛たる人間文化の花が開いていく地球を展望されている。東哲の責任でそのような時代を創っていきたい。

一．叡智の結集で「世界市民の連帯」に貢献！

世界を見渡すと、前述した数々の問題群は、様々の局面において分断・対立・不信を生み出してもいる。これらを克服するためには、世界の人々が、連帯・共生・信頼し合うことが重要である。池田先生は、叡智の結集で、それに貢献することを我々に託された。「叡智の結集」とは、二つの側面から拝される。一点目は、東哲における叡智の結集である。先生は「研究員相互の密接な協力関係」を強調され、自説に固執して大局観を欠くのではなく、「一人一人の研鑽の上にさらに討議し合い、補い合ってこそ完璧を期することができる」と述べられている。二点目は、国内外の優れた学識者・研究機関との文明間・宗教間対話による世界の叡智の結集である。こうした活動を通して、世界市民の連帯に貢献していきたい。

一．「世界の東哲」として平和の地球文明を創出！

東哲の創立の精神の一つは、「平和のために奉仕していく」ことである。近年においては、「法華経――平和と共生のメッセージ」展を国内外で展開し、現在まで 17 カ国・地域で約 90 万人の鑑賞者が訪れている。法華経に内在する生命尊厳と万人の平等の思想、それを基盤とする平和・共生の理念を発信する同展は、様々な宗教圏・文化圏において理解と共感の輪を広げている。今後も、世界の諸機関・市民と連帯してこの輪を広げ、平和の地球文明の創出を目指すとともに、誰人も置き去りにしない幸福な社会の実現へ尽力していきたい。

創立構想 60 周年に寄せて

東洋哲学研究所の創立は、1961 年（昭和 36 年）2 月 4 日に、インドのブッダガヤを訪問した創立者・池田大作SGI会長が、東洋の英知を探究・発信する学術機関の設立を構想したことにある。東洋哲学研究所では、同日を 2・4「東洋哲学研究所の日」として、毎年、記念の集いを開催している。ここでは、国内外の学識者から寄せられた構想 60 周年の祝福の声を紹介する。

研究所の存在は創立者の思想闘争の証

バンバン・ウィバワルタ
（国立インドネシア大学教授）

池田大作先生が 1961 年に東洋哲学研究所を創立する構想を持たれてより、本年で 60 周年を迎えました。私ははじめに、この研究所の創立構想 60 周年をお祝い申し上げますとともに、研究所がこれまでに行ってきた歩みと努力を高く評価するものです。

ご存知のように、池田先生は時代を遥かに超えた未来的な思想を持っておられます。もちろん、東洋哲学研究所の創立に着手するに当たっても、長い思考プロセスを経て様々な検討を重ねてこられました。このような池田先生の思想闘争の成果である研究所の存在を鑑みた時、先生が大きな期待を注いでこられた青年たち、そして私たちは、その存在によって生じた恩恵にあずかってきたのではないかと思うのです。先生がされてきた話の端々から耳にするのは、尊厳を持ったすべての生命の可能性と独自性に関する普遍的な法則です。

インドネシア大学図書館で開催された「法華経――平和と共生のメッセージ」展（2019 年 9 月）。会期中、8700 人が鑑賞に訪れた

この法則によって、先生は絶え間なく平和のメッセージをもたらすだけでなく、人類を調和と共生の方向へと導いているのです。すべての人間を高貴でかけがえのない存在として位置づけようとされる先生は、この研究所が存在することによって、先生ご自身の世界平和への思想の魂と核心が持続可能なものとなっているだけでなく、この地球上のあらゆる地域にそれらを広げているのです。

インドネシア創価学会の友人から「法華経――平和と共生のメッセージ」展を開催したいとの連絡があった時、私たちインドネシア大学は、類まれで非常に重要な展示会を行うことができるということを心から歓迎いたしました。この展示会は香港、インド、スペイン、韓国など様々な国や地域で開催され、インドネ

シアで世界 17 カ国・地域目になるとのことでした。人間の叡智の遺産のひとつである法華経を紹介する展示会は 2019 年 9 月 10 日から 24 日までインドネシア大学図書館で開催することができました。この法華経展の開幕式には、私たちインドネシア大学のムハマッド・アニス学長、さらに故・ワヒド第 4 代大統領のシンタ・ヌリヤ・ワヒド夫人のほか、多くの人々が列席して行われ、会場となった広大なインドネシア大学図書館の館内を埋め尽くしました。展示会では、法華経に内在する哲学が世界各地へと伝播していったことに関する研究成果が公開され、2,000 年の歴史を刻む貴重な仏教経典の写本（複製）、絵画などが多数展示されました。

多数の学生も鑑賞したインドネシア大学・法華経展。インドネシア世界記録博物館創立者のジャヤ・スプラナ氏、同大学のヌルハディ・マゲットサリ教授、蔦木栄一委嘱研究員によるシンポジウムも行われた

会場は、連日多数の鑑賞者で賑わい、インドネシア大学の学生たちはもちろんのこと、様々な大学や、小学校、中学校、高校の児童・生徒たち、さらには一般市民も展示会に訪れました。私は、非常に専門的で的確にまとめられた法華経展の内容に対して、大変に興味をひかれ強い関心を抱いたといういくつかの感想を直接耳にしています。展示会の明確な目的と池田先生の委託に沿った内容の構成によって、平和と調和を創造する次世代の様々な背景を持つ若者たちに、強い印象とインスピレーションを与えることが結果としてできたのです。この展示会の成功の理由は、その内容が極めて重要で興味深いというだけではありません。何よりも、非常に分かりやすく、専門的に鑑賞できるようにと展示会の企画と監修を行ってきた東洋哲学研究所の貢献によるものなのです。

現在の世界情勢を見ると急速に進む変化があり、国家や様々な集団のなかで紛争の火種となる問題群が影を落としています。私は、こうした状況にあって、法華経展を通して平和と共生のメッセージを発信している東洋哲学研究所の存在と役割が、非常に重要なものとなっていると思います。法華経展が発信するメッセージは、この地球上のどこにいたとしても、すべての個人に内在しているものであり、インスピレーションをもたらす価値観なのです。

東洋哲学研究所が進める研究活動の成果によって、多くの人々が前向きな方向へと進んでいけるという相乗効果が発揮されています。そして、より良く、より豊かで、より幸せな生活と社会秩序を生み出すことができていると実感いたします。

創立構想 60 周年に寄せて

思想の力を再発見する場への期待と憧れ

市川　裕

（東京大学名誉教授）

東洋哲学研究所の創立構想 60 周年を祝すにあたって、その構想時の思いに戻って、研究所の意義を考えてみたい。研究所創立者の池田大作SGI会長は、「東洋学術研究」の第 1 号に「創刊を祝す」と題して寄稿し、3 つの点に言及している。

「第一は、研究員所員一同が世界最高の哲理をもち、身に実践している故に東洋の思想・文化を観察して、必ずやいまだ誰人も到達し得ない分野を開拓し、その見識にも新たな結論を生むことであろう」「第二にこの研究所の活動は、他の研究所と違い常に大衆に直結されて、少しも遊離することがない」「第三には、研究員相互の密接な協力関係である。事を成すにまず研究員の団結が要望されることは当然であろう」という。東洋哲学研究所のメンバーは、最高の哲理を共有し、大衆と直結しつつ、互いに切磋琢磨し協力するというのだ。研究所の独自の価値が見出され、その価値を発信していくこと、なかんずく、思想の力を磨いていくことが強く期待されている。

人間は思想によって動いていく。思想の力とは、人間の一番大事なところを深く追究していくことによって生じるものであり、これを忘れたら世の中も自分も揺れ動いてしまう。弁論術という意味ではなくて、深く考えて説得力のある論を立て、常に原点に立ち返ることで思想に力がついていくのだ。SGI会長の思想・哲学には、一人を大事にして語っていくという考えがある。それを、研究所員一人一人が共有してほしいという強い思いがある。人によって色々な苦しみや状況が異なるわけだから、それに合わせて語りを変えていくためには、その基盤にしっかりとした思想がなければならない。「大衆と直結する」とは、このことではないか。研究所員が互いに論じ合い思想を鍛えることが、研究所を創立した根本の目標ではないだろうか。

東洋哲学研究所の基本方針の一つで、その独自性を際立たせているのが、法華経の包括的研究ではなかろうか。法華経写本を所蔵する世界中の研究所と常に学術交流が行われているのは特筆に値しよう。特に 1998 年には、門外不出であったロシアの"ペトロフスキー写本"が日本で公開され、一般の人々がそれを間近で見ることができたという事実は、事情を知る人々にはまさに奇跡的だったといわれる。これは、SGI会長が営々と築いてきたソ連時代からの信頼関係によって成し遂げられたものであるが、研究所がロシア科学アカデミー東洋古文書研究所と学術的な交流を続けているという事実は、信頼関係が継承されている証しであり、今後の一層の研究交流が期待される。

思想を鍛えるという点で研究所に期待したいのは、仏教以外の諸宗教哲学・思想との比較研究によって、仏法の哲理の独自性を際立たせることである。SGI 会長はこれまで、多くの学識者たちと対談を行っているが、その多くは日本とは異なる宗教文化の人たちである。対談では当然、相手の宗教を理解した

うえで、常にそれを意識しながら世界宗教との比較が行われていたのではないか。できるならば、こうした対談のなかで披歴されたSGI会長の思想・哲学を、あらゆる角度から検証し、その思想の独自性を吟味して提示する研究がもっともっと行われてほしいのだ。それも、単に書物の中身を整理するだけではなく、私たちが今直面している問題群を自覚して、その解決のための思想を対談のなかから見つけ出すことによって、対談を未来によみがえらせることができる。研究所員同士が切磋琢磨してそれを行えば、これほどの適役はないと思う。

そこで、研究所の所員に求められるのは、現に自分たちが直面する問いに向き合って仏法思想を鍛えていくこととなる。焦眉の難問に直面した時に思想が鍛えられるという例は、古今東西に満ちている。例えば、キリスト教を現代から振り返って見ると、神学的に体系化されたと思われる書物は、その多くが論争の中から生まれてきている。典型的なのは、アウグスティヌスの『神の国』である。これは、組織神学の体系的な書物が必要だから書かれたのではなくて、ローマ帝国という強固な社会がいともたやすく蛮族に征服されてしまったのはキリスト教のせいではないかという強い批判に対して、自分たちはこの世のものではない天国の救済を目指しているという形で説得するためのものであった。書かないで放置すれば、必然的に自分たちが生き延びることができない。今やらなければいけない、向き合わざるを得ない問題と向き合うなかで思想は言語化されていくのである。

ある問題を前に、SGI会長はどう語っているのか。あの書物にこう書いてあったが矛盾はないか。どういう場面で発せられた言葉なのか。そのような論議を重ねていって、思想の深みを探ってほしい。ユダヤ教で言えば、それはタルムード的な方法学になる。何か問いが発せられた時にそれを自分の意見としてではなくて、まずは根拠となる先人の教えを引いたうえで、それがどこまで辻褄があっているのかを互いに吟味する弁証法である。そして、問題に対して「こう考えるべきだ」「いや、こういう理由でこうすべきではないか」という形で議論を深めていくのだ。カトリックの修道院は閉鎖的なイメージがあるが、実は一番思想的に自由だったと言われている。そういうなかで、自分たちの信仰の強さ弱さを知り、異なる思想同士をぶつけ合っていた。自分たちの弱みを知り、強みを理解することによって思想を鍛えていった。こういうことができる環境が、東洋哲学研究所ではないだろうか。

SGI会長が築き残してきた思想・哲学を、さらに深め支えていく屋台骨としての役割を東洋哲学研究所は常に考えてもらいたいし、その推進力となるような思想的な発信を心より期待したい。

創立構想60周年に寄せて

創価学会の世界宗教化を支える哲学

佐藤　優
（同志社大学客員教授、作家、元外務省主任分析官）

創価学会は、池田大作SGI会長の指導によって、現在、世界宗教に発展しつつある。世界宗教化にあたっては、それを支える哲学が重要になる。筆者の考えでは、創価学会の世界広宣流布を推進する哲学を形成するうえで、東洋哲学研究所が大きな役割を果たしている。

キリスト教神学において、キリスト教の伝統と信仰に基づいて哲理を語るのが組織神学だ。これに対して、キリスト教を基盤とした哲学もある。この場合、重要なのは、キリスト教という宗教に限定されない普遍的言語を用いることだ。創価学会の教学と、東洋哲学研究所が展開する哲学活動も、キリスト教神学と哲学の関係に似た構造があるように思える。世界宗教にとって、哲学は不可欠の知的営為なのである。

東洋哲学研究所設立の経緯について、「聖教新聞」の社説はこう記す。

<60 年前の 1960 年 10 月、池田先生は北南米を訪れ、世界広布への第一歩を踏み出した。そして翌 61 年 1 月下旬には、アジア歴訪の旅へと出発する。

道中、先生は思索を巡らせた。アジアには南伝仏教（上座部仏教）の国もあれば、イスラムの国もある。宗教はもとより文化や社会構造も多様だ。その内実を正確に認識しなければ、平和への実りある対話を行うことはできない――。

同年 2 月 4 日、先生は仏教発祥の地・インドのブッダガヤで決意した。

「東洋および世界の思想・哲学・文化を多角的に研究する機関が絶対に必要だ」「誰人も納得のできる『文明間の対話』『宗教間の対話』をやっていこう」

これが「東洋哲学研究所（東哲）」設立に結実し、2・4「東哲の日」の淵源となった。

構想から 1 年後の 62 年 1 月 27 日には、東洋学術研究所（現・東哲）が誕生。発足式の席上、先生は"新文化を創造する知性の府に"との期待を寄せた。

以来、東哲は法華経を中心とした仏教哲学、世界の宗教・思想の研究や、異文化間の交流・対話を推進してきた。また展示会など民衆に開かれた運動を通し、法華経の哲理を世界に紹介してきた。>
（2020 年 2 月 2 日付「聖教新聞」4 面「社説」）

「東洋および世界の思想・哲学・文化を多角的に研究する機関が絶対に必要だ」「誰人も納得のできる『文明間の対話』『宗教間の対話』をやっていこう」という池田会長の言葉をキリスト教神学の言葉に翻訳するとエキュメニズムになる。エキュメニカルとは「人の住む世界」ということだ。この世界には、キリスト教、

ユダヤ教、仏教、ヒンドゥー教、イスラム教、神道などの宗教を信じる人、また宗教を信じない人がいる。これらすべての人々と「人間とは何か」という切り口で対話し、相互理解を深めていくことがエキュメニズムの重要な課題になる。

連続公開講演会「人類の未来と人権」（2019 年 10 月 11 日、新宿区で）。佐藤氏は「キリスト教における神権と人権」をテーマに講演を行った

東洋哲学研究所はこの課題を見事に遂行している。重要なのは、東洋哲学研究所の事業を創価学会が、法華経の精神に基づく人間主義の具現化と考えていることだ。

原田稔創価学会会長と樺澤光一学生部長の以下のやり取りが興味深い。

<◆樺澤　人間主義は、法華経の精神でもあります。東洋哲学研究所（東哲）が中心となって、06 年から始まった“法華経展”は、イスラム文化圏のマレーシアやインドネシア、上座部仏教国のタイをはじめ、欧州、南米など世界 17 カ国・地域で約 90 万人が観賞し、共感の輪が大きく広がっています。

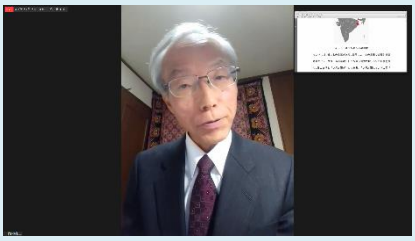
◇原田　先生は各国の宗教、文化、民族などについて正しく認識していくことが大切であるとされ、東洋をはじめ世界の思想・哲学・文化を多角的に研究する機関として、1962 年 1 月に東哲の前身となる東洋学術研究所を発足されました。これは、先生の創立する各種の文化・教育機関の先駆けでもありました。こうした先生の打たれた手が一つ一つ実を結び、今日の世界との連帯があるのです。>（2020 年 7 月 30 日付「聖教新聞」3 面「〈池田先生の会長就任 60 周年　青年部が原田会長に聞く　II 部〉第 16 回「御書根本」を貫く民衆仏法の学会教学⑤」）

「各国の宗教、文化、民族などについて正しく認識していくことが大切である」という池田SGI会長の指導に基づいて、東洋哲学研究所は、東洋だけでなく、全世界の人間のため、そして人間にとどまらずすべての宇宙生命に関係する高度な研究を真摯に行ってきた。この研究所の歴史と現在に敬意を払うとともに、今後の一層の発展に期待する。

オンライン連続公開講演会
「信仰と理性――コロナ禍のなかで」

新型コロナウイルスの挑戦に人類が応戦しゆくために、池田先生が 1973 年に発表された「スコラ哲学と現代文明」講演で論じた「信仰と理性」を主題として、オンラインによる連続公開講演会「信仰と理性――コロナ禍のなかで」を企画した。講演会では、人類の理性的な試みである医療行為や政治的な取り組みと、生死を見つめる信仰が矛盾を超えて統合される新しい哲学の構築を探る場となった。

◆講　師：竹内 啓二（麗澤大学名誉教授）
◆開催日：2020 年 10 月 10 日
◆方　式：YouTube ライブ限定配信
◆テーマ：インドの詩聖ロビンドロナト・タゴールの思想
――信仰と理性の観点から



講演では、「今回は、信仰と理性という視点からタゴールの思想を見ていきますが、信仰の方は、宗教と理解し、理性は、合理性、論理、さらには科学などに関連するととらえていきたいと思います」と述べつつ、タゴールと仏教についても触れ、「タゴールは、タゴール国際大学を、仏教研究の大学とする構想があり、仏教の生き生きとした思想を伝えるという考えももっていました。生きとし生けるものへの慈悲の心のメッセージは、タゴールが説く、愛の思想につながっています。仏陀の慈悲は、自分の子どもや自分の仲間だけに注がれるのではありません。すべての人間、生きとし生けるものに注がれます。タゴールは、この仏陀の理想に世界の人々が集い来るように呼びかけたのです」と語った。

◆講　師：佐藤 弘夫（東洋哲学研究所委嘱研究員、東北大学教授）
◆開催日：2020 年 10月17日
◆方　式：YouTube ライブ限定配信
◆テーマ：仏の消えた浄土
――日本列島における多文化共生の系譜

佐藤氏は「コロナのような感染症は、かつて日本では疫病神と呼ばれ、得体のしれない存在が引き起こすものだとされました。そして、人間を超越した力によってもたらされると信じられていました。近代以前は、いつ死ぬか分からない大量死の時代でありました。だからこそ、生と死を貫くストーリーが必要となったのです。死が終わりではなく、次の生のための移行期であると考えられてきたのです」と語った。

さらに、「人は生だけでは完結しません。今は、死を排除しています。人類の歴史を見た時、必ず生と死をつなぐストーリーが必要です。仏教は、この生と死について、最も良質な思想を提供してきたと思います。これからもう一度、きちんと着目していいものです。過去の思想・宗教とするのではなく、どうやって宗教の本質をとらえていくのかが求められているのです」と望んだ。

コロナ禍に対応した形で実施した初のオンラインによる連続公開講演会では、YouTube ライブ配信を使用したことによって、全国、全世界からの視聴累計は1400を超えた。タイ、フィリピン、インドなどアジア各国をはじめ、イギリス、フランス、アメリカなど欧米からも視聴され、リアルタイムでの質問募集により講師との活発な意見交換を行うことができた。

◆講　師：市川 裕（東京大学名誉教授）
◆開催日：2020 年 11 月 28 日
◆方　式：YouTube ライブ限定配信
◆テ ー マ：21 世紀の信仰と理性――ユダヤ人にみる宗教者の使命

20 世紀前半の科学と戦争の時代にあって、ナチスのホロコースト、ソ連の宗教弾圧等により、欧州ユダヤ人社会が民族滅亡の危機に瀕した歴史的事実とともに、西欧の「信仰と理性」は「啓蒙と野蛮」に変質したことに言及した氏は、リトアニアのバーリン、レヴィナス、レイボヴィッツの 3 人を、ホロコーストに立ち向かったユダヤ人として挙げた。そのなかでもレヴィナスが、哲学者ハイデガーがナチスの党員であったことに絶望したことに触れ、「まさに信仰と理性の分断でありました。しかし、その一方で、『信仰の天才』ともいえるユダヤ教正統主義のラビであるシュシャーニと出会い、徹底して信仰を深め研鑽をすることで、師資相承が生まれたのです。誤った信仰との闘いが聖書を生み出したように、この場合は全体主義になりますが、宗教とは本来、精神の闘争なのです」と語った。

◆講　師：岡嶋 裕史（中央大学教授／同大学学部長補佐）
◆開催日：2020 年 12 月 12 日
◆方　式：YouTube ライブ限定配信
◆テ ー マ：ポストモダンと信仰――AI と意思決定の外部化

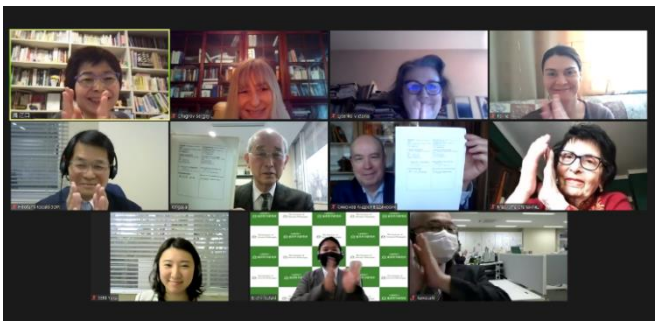
講演では、「戦後から現在にかけての社会は、皆が同じ価値観を有し、同じ生き方を志向するという『大きな物語』から、個人主義が台頭する『ポストモダン』への変遷がありました。そこに科学技術の進展も影響し、“皆が違って良い”“自由にして良い”という考えが生まれました」と述べつつ、「科学技術は万能だとされ、知らないことは怖いことだという歴史が続いてきました。それを説明することで安心を得てきたなかで、合理的証明をする科学に宗教・哲学が圧迫されてきた流れがあります。科学はますます範囲を広げ、すべてを説明できるという態度をとっていますが、これは傲慢なことではないかと私は思います。機械や道具を使用することで、人間は自らの機能を外部化してきましたが、最後に残された能力こそが意思決定です。自分がどう生きるかを考えるには、その基盤に宗教・哲学がなければなりません。私は、この課題をさらに探究していきたいと考えています」と望んだ。

NEWS

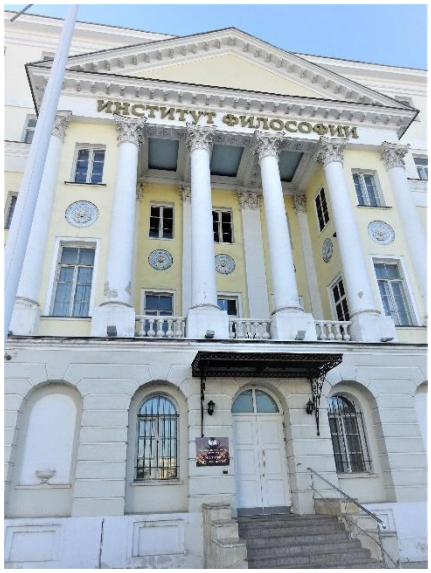
ロシア科学アカデミー哲学研究所と学術交流協定を締結

2021

ロシア科学アカデミー哲学研究所との学術交流協定調印式が 2 月 5 日、オンラインで行われ、同研究所のアンドレイ・スミルノフ所長、東洋哲学研究所の桐ケ谷所長らが出席した（**写真**）。



ロシア科学アカデミー哲学研究所は、ロシア科学アカデミーにおいて哲学分野を担う唯一の研究機関として 1921 年に設立され、数多くの出版、論文発表を行っている。同研究所と東洋哲学研究所は、共同シンポジウム「世界の諸文化の中の仏教」（2008 年）、『仏教哲学百科事典』の出版（執筆・編集に参加）を進めるとともに、哲学研究所への表敬訪問（2018 年）などの交流を行ってきた。協定では、刊行物の交換や双方の研究員による定期刊行物への論考の寄稿などを通して、学術活動の共同実施や相互交流のさらなる促進を盛り込んでいる。今回の調印で東洋哲学研究所の学術交流協定の締結機関は 12 機関目となる。



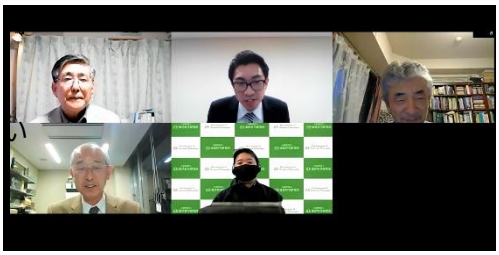
モスクワ市内のロシア科学アカデミー哲学研究所の外観

調印式でスミルノフ所長は「グローバル化が進んだ世界のなかで、東洋の哲学の研究を進めていくのは、21 世紀の発展にとって必要なものであると考えます。両機関が交流を通じてお互いをより良く知ることによって、21 世紀の哲学の深化に寄与していきたいと思います」と語り、さらなる交流推進を約し合った。

コロナ禍でのオンラインの取り組み

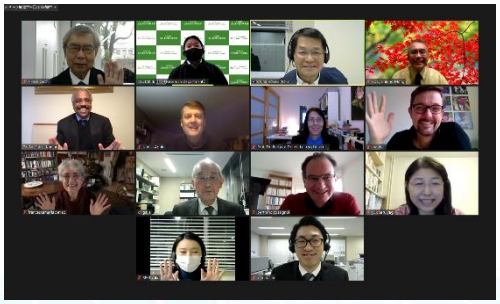
東洋哲学研究所では、コロナ禍における新しい研究活動の推進を図るため、連続公開講演会をはじめとする各種行事、所属する研究員・海外研究員・委嘱研究員による研究部員会や研究部門・プロジェクトの研究会をオンラインで積極的に実施してきた。

7 月 28 日には、コロナ禍では初めてとなる所外講師を招いたオンライン研究会である「社会と宗教」レクチャーを開催した。ここでは、東京大学名誉教授の市川裕氏による「現代世俗社会におけるユダヤ教正統主義の挑戦」を行った。レクチャーでは、①トインビーのユダヤ・モデルの行方②正統主義の現在：イスラエルのブネー・ブラク市訪問③近代と遭遇した伝統主義：リトアニア正統主義と出身貢献者④世俗主義への挑戦としての正統主義のコンテクストの変遷と核心⑤日本国内の宗教事情は、上記の分析からどのような示唆を受けるか――の 5 つを柱とした発表が行われ、研究員との質疑応答が行われた。



「東洋学術研究」第 59 巻第 2 号（通巻 185 号）では、オンライン特別てい談「コロナ禍の時代をいかに生きるか――歴史に学ぶ人間への知見――」の模様（**写真上**）を収録した。ここでは、「人間はなぜ感染症に直面するのか」「感染症は人間に何を伝えているのか」という根本的な問いに向き合えていない現実を踏まえ、コロナ禍が投げかける「人間への知見はどこまで創出できのか」という宗教の本質にもつながる命題を、ユダヤ教を専門とする東京大学名誉教授の市川裕氏と東洋哲学研究所の石神豊氏（主任研究員）、山岸伸夫氏（委嘱研究員）の 3 名によるてい談で論じ合った。

また、2021 年 2 月 4 日には、海外研究員によるオンライン研究報告会（**写真下**）を実施。カナダ、ドイツ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、インド、マレーシアで活動する 9 名が、今後の研究についての打ち合わせを行った。



研究部員会／部門別活動

東洋哲学研究所では所属する各研究員が研究成果を発表する場として、研究部員会と研究部門・プロジェクトごとの研究会を開催している。※2020年2月以降はオンラインによる実施

研究部員会

1月21日「宗教アーカイブズの方法と課題」坂口貴弘（委嘱研究員）
9月15日「アム・ダリヤ流域の仏教遺跡 ～クシャン族の諸王と仏教～」川崎建三（委嘱研究員）
10月20日「生命主義と超越性――生命主義的救済観を再考する」大西克明（研究員）
11月24日「仏教思想における『人間の尊厳』と『生命の尊厳』」前川健一（研究員）
12月15日「他者の身体とつながる『心』」平良直（研究員）
1月19日「川面凡児と牧口常三郎――『信仰的競争』と『人道的競争』」松井慎一郎（委嘱研究員）
3月16日「日蓮における戒」大津健一（委嘱研究員）

部門・プロジェクト研究会

■第２部門「人類的課題と宗教」

第４プロジェクト 宗教間対話

7月 7日「『スコラ哲学と現代文明』講演発表時の時代背景とその内容」蔦木栄一（委嘱研究員）
「『スコラ哲学と現代文明』の解読――哲学・神学の視点から――」山崎達也（研究員）
9月10日「人間革命の哲学的意味」山崎達也（研究員）

第５プロジェクト 文明論

7月28日「*Choose Life* に見る『池田―トインビー』の文明論」三好楠二郎（委嘱研究員）

第６プロジェクト ジェンダー

1月28日「日本社会における男女平等への『正常性の障害』」フィスカーネルセン・アネメッテ（委嘱研究員）
9月19日「『SGIの日』記念提言における『女性』：女性と国際社会の歴史的考察から」蔦木文湖（委嘱研究員）
「第二次世界大戦中のアメリカ合衆国の女性：アメリカ史教科書から」大島京子（研究員）
「北京香山慈幼院卒業生の進路とネットワーク：『北平香山慈幼院院刊』を手がかりにして」大江平和（委嘱研究員）
12月12日「夏目漱石の『こゝろ』とゲーテの『若きウェルテルの悩み』との関連性と比較――女性観の類似性と差異性」岸・ツグラッゲン・エヴェリン（委嘱研究員）

12月12日「狂言の描いた女性の苦境　結婚、離婚、労働、性被害、暴行、拉致･･･」藤岡道子（委嘱研究員）

2月27日「女性の世紀とはなにか――女性の世紀を創る女性の生き方」長尾名穂子（委嘱研究員）

3月27日「鎌倉時代の女性と財産――日蓮門下の事例から――」梶川貴子（委嘱研究員）

第７プロジェクト 生命倫理

10月24日「生殖補助医療の現状と展望」石川てる代（委嘱研究員）

第８プロジェクト 科学技術・環境問題

11月14日「熱帯林減少　発生メカニズムの解明と有効な解決策」宮本基杖（委嘱研究員）

12月12日「持続可能な開発と創価教育――創価大学での実践事例の考察」島田健太郎（委嘱研究員）

■第３部門「仏教の現代的展開」

部門研究会

2020年2月1日

「日蓮の平和論」小林正博（主任研究員）

「平和学の今日的課題とSDGs――『全国データSDGsと日本――誰も取り残されないための人間の安全保障指標』の問題意識を中心に」玉井秀樹（委嘱研究員）

「『平和提言』にみる核軍縮・核兵器廃絶への提案Ⅲ――時代的状況を視野にいれて 2009年～現在の考察――」大島京子（研究員）

第10プロジェクト 平和と人権

11月14日「人間の安全保障とSGI提言」長尾名穂子（委嘱研究員）

1月30日「国際連合と『SGIの日』記念提言1　1983～1990年」大島京子（研究員）

3月30日「『平和の文化』とSGI提言（2010以降）」佐藤裕子（委嘱研究員）

第11プロジェクト 教育論

2021年2月20日

「村田喜代子著『飛族』研究～ナラトロジー（視点論、プロット、語りの審級）の視点から～」寒河江光徳（委嘱研究員）

「翻訳作業を通して牧口思想研究の方法を考える」アンドリュー・ゲバート（委嘱研究員）

「『創価教育学体系』形成史試論：引用文献からの考察」前川健一（研究員）

「『創価』の教育思想の継承と発展――牧口常三郎から戸田城聖、池田大作へ」高橋強（委嘱研究員）

「法華経――平和と共生のメッセージ」展

「法華経――平和と共生のメッセージ」展は、東洋哲学研究所が企画・制作する展示会で、2006 年からスタートした。同展は、研究所が進める法華経研究の成果を広く公開するとともに、法華経の伝播の歴史と経典の内容を分かりやすく紹介するものである。

マレーシア・クアラルンプール展（2014 年）

法華経展の淵源となった 1998 年開催の「法華経とシルクロード」展では、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所が所蔵する約 10 万点に及ぶコレクションの中から、オリジナルの仏典写本、木版本など 14 言語 47 点が日本初の公開となった。そして、同展を発展・拡充したのが「法華経――平和と共生のメッセージ」展である。ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所、中国・敦煌研究院、インド文化国際アカデミーの全面的な協力により、法華経写本の画像および複製の公開や敦煌莫高窟の再現、仏教文物・各種資料の提供なども行われている。その出品物には、8 世紀書写とされるペトロフスキー法華経写本や 1～2 世紀書写のガンダーラ語の法句経の複製などが含まれる。また、敦煌莫高窟の壁画に描かれた飛天の模写絵や、敦煌文書の法華経（複製）をはじめ、経典書写の際に使用された鉄筆や白樺の樹皮など、展示全体で約 160 点に及ぶ文物が出展されている。研究所では、同展を解説した『ガイドブック法華経展――平和と共生のメッセージ――』を編纂し、日本語、英語、韓国語、中国語（簡体字・繁体字）の 4 言語で刊行している。

ブラジル・サンパウロ展（2011 年）

タイ展（2017 年）

展示会のコンセプトは「目で見る法華経」であり、日本だけでなく、仏教発祥の地であるインド、ネパールやイスラーム文化圏のマレーシア、上座部仏教国のタイなどアジア各地をはじめ、ヨーロッパ、南米で開催。世界 17 カ国・地域で 90 万人が鑑賞する展示会となっている。これまで、韓国の李壽成元首相、タイのウィーラ・ロートポッチャナラット文化大臣、香港中文大学終身主任教授の饒宗頤博士、翻訳家のバートン・ワトソン氏など各界を代表する来賓も展示会に訪れている。

「法華経写本シリーズ」

東洋哲学研究所と創価学会は、法華経写本を所蔵する世界の研究機関および研究者の協力を得て、「法華経写本シリーズ」の刊行を推進してきた。これは、各国に保存されてきた貴重な法華経写本を鮮明なカラー写真で撮影した「写真版」と、写本の"読み"をローマ字化した「ローマ字版」を公刊し、世界の研究者に広く提供して『法華経』を中心とした初期大乗仏教の研究に貢献するためのものである。

1994 年に出版委員会を発足させ、1997 年から 2019 年にかけて全 17 タイトル 19 点を発刊してきた（非売品）。また、当シリーズが発刊された契機の一つとして池田SGI会長に対して、世界の研究機関等から貴重な「法華経写本」の複製やマイクロフィルム等が寄せられてきたことがあげられる。

梵文法華経の校訂本としては「ケルン・南條本」（1908～1912 年）、「荻原・土田本」（1934～1935 年）、「ダット本」（1953 年）等の先駆的業績があったが、今日の学問的水準から見ると、より正確で信頼に足りる校訂本が望まれている。当シリーズは、そのための基礎資料を提供するものである。

東哲叢書「仏典現代語訳シリーズ」

法華思想の系譜にあって特に著名な注釈書、思想書を著し、後世に甚大な影響を与えたのが中国の智顗、湛然、日本の最澄である。この法華思想の系譜は、後世の日蓮へと引き継がれ、日蓮教学の基礎理論を提供する重要な仏教文献となるのである。

これらの仏教文献は『大正新修大蔵経』等に収録されており、原典は漢文である。この原典の現代語訳を進めるのが「仏典現代語訳シリーズ」である。これまで『現代語訳　法華玄義（上）』、『現代語訳　法華玄義（下）』を刊行してきた。2020 年 11 月には、シリーズⅣ『現代語訳　法華玄義釈籤（上）』（菅野博史・松森秀幸訳注）、2021 年 3 月にはシリーズⅦ『現代語訳　顕戒論』（前川健一訳注）をそれぞれ発売した。購入方法の詳細はホームページで公開している。

出版物

東洋学術研究　第 59 巻　第 1 号（通巻 184 号）定価：1,362 円（税込）

主な内容

■特集 1「人類の未来と人権」（連続公開講演会より）
キリスト教における神権と人権・・・・・・佐藤　優（同志社大学客員教授）
「生命尊厳」の哲学を世界精神へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・桐ケ谷　章（東洋哲学研究所所長）
マイノリティと個人の尊厳：LGBT という言葉から考える・・・・・・池田　弘乃（山形大学准教授）
「人権」の位置と形成――近世・近代の歴史体験から・・・・・・黒住　真（東京大学名誉教授）

■特集 2「シルクロード――仏教東漸の道(2)」
ガンダーラからバクトリアを経て中国へ伝わった大乗仏教
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・辛嶋　静志（創価大学国際仏教学高等研究所元教授）
タルミタ=テルメズの仏教建築の歴史に関して
・・・・・・シャキルジャン・ピダエフ（ウズベキスタン共和国科学アカデミー芸術学研究所所長）
クシャノ・ササン朝時代のガンダーラ――ラニガト仏教寺院址の発掘を通して――
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小谷　仲男（京都女子大学元教授、富山大学名誉教授）
キルギスタン・チュー川流域における中世仏教の考古遺産（前編）
・・・・・・・・ヴァレリー・コルチェンコ（キルギス共和国国立科学アカデミー歴史・考古・民俗学研究所研究員）
法華経の東漸―図像を中心に―
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小山　満（東洋哲学研究所委嘱研究員、創価大学名誉教授）
『瑜伽師地論』に対する未知の注釈書の梵文写本断簡―予備的報告―
・・・・・・・・・・・張涵静（中国宗教研究センター助理研究員）／葉少勇（北京大学准教授）

東洋学術研究　第 59 巻　第 2 号（通巻 185 号）定価：1,362 円（税込）

主な内容

■特別企画「コロナと人間を語る」
提言：ポスト・コロナ――“人間の次元”からの新しい変革
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・フェリックス・ウンガー（ヨーロッパ科学芸術アカデミー会長）
特別てい談：コロナ禍の時代をいかに生きるか――歴史に学ぶ人間への知見――
・・・・・・・・・・・・市川　裕（東京大学名誉教授）／石神　豊（東洋哲学研究所主任研究員）
／山岸　伸夫（東洋哲学研究所委嘱研究員）

■特集「シルクロード――仏教東漸の道(3)」
法華経の旅――コータンから敦煌へ
「すべてを見通す」菩薩とコータン――張小剛論文に対するコメント
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ロケッシュ・チャンドラ（インド文化国際アカデミー理事長）
“涼州諸国王”と蜀地方・・・・・・・・・・・・・・・・・関尾　史郎（新潟大学人文社会科学系フェロー）
ワフシュ神とラームセート神――バクトリア語文書から見たトハーリスターンにおける宗教事情の一側面――・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・宮本　亮一（京都大学人文科学研究所非常勤研究員）
ユーラシア東部への瑠璃器の移入と仏教
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・朴天秀（慶北大学教授、同大学シルクロード調査研究センター長）
バーミヤーン出土仏教写本の二十年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・松田　和信（佛教大学教授）
正倉院宝物の故郷――『東大寺献物帳』の分析から　その一
・・・・・・・・・・・・・・米田　雄介（元宮内庁正倉院事務所長、公益財団法人古代学協会理事）
キルギスタン・チュー川流域における中世仏教の考古遺産（後編）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・ヴァレリー・Ａ・コルチェンコ（キルギス共和国国立科学アカデミー歴史・考古・民族学研究所研究員）
仏教東漸の道――捨身飼虎と求法僧――・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大村　次郎（写真家）

The Journal of Oriental Studies vol. 30　定価：2,200 円（税込）

Main Articles

On Publication of *The Journal of Oriental Studies* Vol. 30・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Akira Kirigaya

Statement: Post-Corona, New Change from Human Dimension・・・・・・・・・・・・・・・・・Felix Unger

■Feature: Silk Road — Views on the Eastward Transmission of Buddhism

Foreword・・Kenzo Kawasaki

Journey of the Lotus Sutra: Khotan to Tunhuang・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Lokesh Chandra

Samantamukha (All-seeing) Avalokiteśvara and Khotan: Comments on Zhang Xiaogang's Paper
・・ Lokesh Chandra

Transmission of Mahāyāna Buddhism from Gandhāra and Bactria to China・・・・Seishi Karashima

On the History of Buddhist Structures in Tarmita-Termez・・・・・・・・・・・・・・・・・・Shakirdjan R. Pidaev

Buddhism in the Chuy Valley (Kyrgyzstan) in the Middle Ages・・・・・・・・・・・・Valery A. Kolchenko

Kalparāja-sūtra and Pagoda Worship・・・Duan Qing

The Contribution of Paper in the Transmission of Buddhist Scriptures in the Western Regions
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

公益財団法人東洋哲学研究所
〒192-0003　東京都八王子市丹木町 1-236
Tel: 042 (691) 6591　Fax: 042 (691) 6588
メールアドレス: iop_info@iop.or.jp
日本語サイト: http://www.totetu.org/
英　語サイト: http://www.iop.or.jp/

公益財団法人東洋哲学研究所

THE INSTITUTE OF ORIENTAL PHILOSOPHY